6．2年保育4歳児K児

養護教諭　渡辺　誓代

事例1　「ねこになるのはいやなの」（4歳児）　10月24日（火）

毎週火曜日の昼に来園している小児科の園医さんと廊下で話をしていると、大きな泣き声が聞こえてきた。声の方を向くと、さくら組のK児が泣いていた。J児とL児が両側からK児の手をひいて、こちらへ連れてきたようだった。

養護教諭「どうしたの？けがでもしたの？」
K児　「うえーーーん」
養護教諭「J児くん、L児ちゃん、知っている？」
J児　L児「・・・・・」困った表情で手をひいている
園医　「泣いていたらわからないよ」
K児　「○×△＊@・・・」泣きながら何か言うが周囲のみんなは聞き取れない
養護教諭「うん？」
K児　「ねこになるのはいやなの」ゆっくりともう一度言う
養護教諭「はー。ねこになるのがいやだったの？」
K児　こくっとうなずく
養護教諭「そうか。わかったよ。けがじゃないのね」

K児の後ろにM児が来ており、養護教諭と目が合う。M児の話を聞こうとすると、J児とL児がK児の手をひいて保育室に戻っていった。K児は泣きやんでいた。

養護教諭「M児ちゃん、K児ちゃんと遊んでたの？」
M児　「うん。最初私がねこで、その後、O児ちゃんがお母さんで、私がお姉ちゃんでK児ちゃんがねこってなったら、泣いたの」

ばつが悪そうに話して保育室に戻った。

＜K児について＞

2年保育で入園以来、発音が不明瞭なことが気に掛かり、担任とともに経過を見ていた。園医先生にも相談し、よく噛むことなどを母親を通じて指導した。K児自身はよく話すし友達にもかかわっていくが、何を言っているかわからず、教師も聞き返すことがあった。この事例でも泣いているのを心配したJ児もL児も、なぜK児が泣いているのか聞き取れなかったので、養護教諭と園医のところへ連れてきたと思われる。M児とは入園当初よりK児と一緒に行動することが多かったが、どちらかというとM児が遊びを主導し、K児がそれに合わせていた。2学期になり、K児も嫌なことは嫌と泣いて主張できるようになり、M児との関係が変わってきているところの事例である。今後、K児の発音の問題と友達とのかかわりを探りながら、K児の学びと援助のあり方を検討していきたい。

事例２　「いっしょにやりたいの？」（４歳児）　　11月10日（金）

園庭のけやきステージの側で、K児・M児・P児・Q児・S児が型に土を入れて、プリンやケーキを作っていた。近くへ行ってみるとK児が声をかけてきた。

K児　　「私ないの」（P児達が使っている型の方を見て言った）
養護教諭「そうなの」

見回すと、すぐ側に柄のついたボウルが落ちていた。

養護教諭「これを使ったら？」（K児の横に置いた時、他児に呼ばれてその場を離れた）

５分ほどして戻るとP児がそのボウルの中に一生懸命土を入れていた。K児は１メートルほど離れたところにしゃがんで、P児を見ていた。おやっと思い、同じようにしゃがんでP児の方を見るとちらっと目が合った。

P児　　「私が作ってるの」（地面の方に目を落として言った）
K児　　「私がしたいの」（小さい声でつぶやき、養護教諭の方を見た）
P児　　「何もしなくていいの！」（少し大きな声で言い、土を入れ続けている）
M児　　「私がやって（作って）あげようか」（K児をなぐさめるようにそっと言った）
K児　　「…・・」

Q児とS児は、近くでそれぞれのプリンを作っていたが、

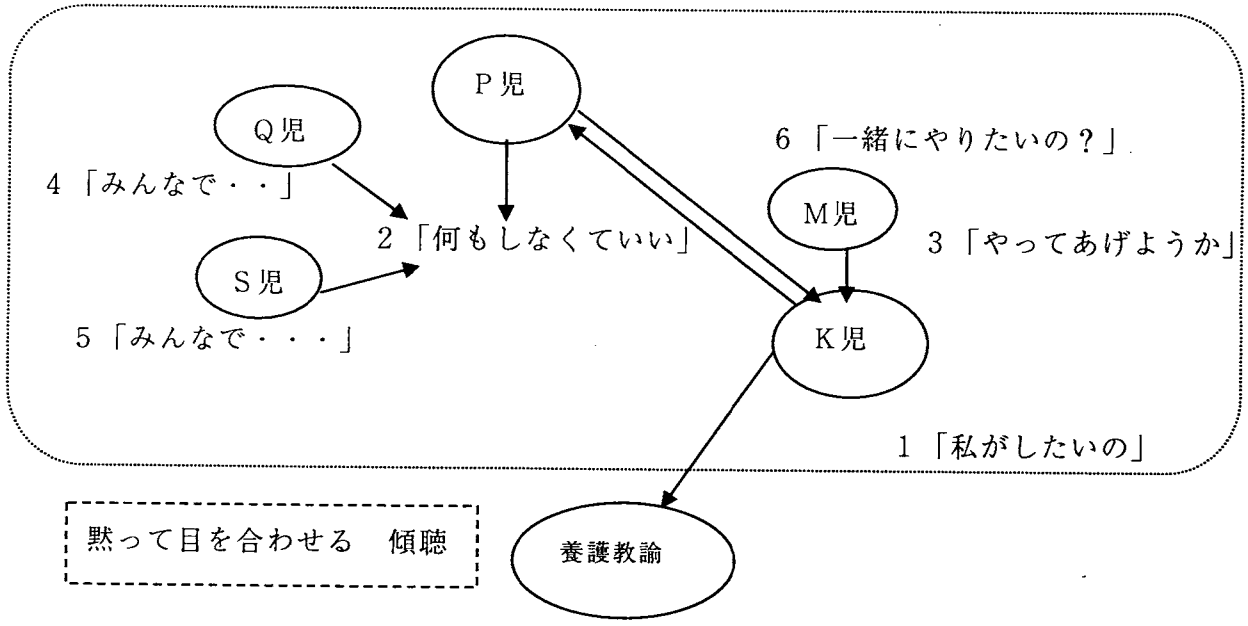
Q児　　「私、みんなで作ったらいいと思う」（自分の型に土を入れながら言った）
S児　　「私もみんなでやったらいいと思う」（Q児と同じように誰に言うともなく言った）

養護教諭が、もう一度P児の顔を見ると、P児はK児に近寄り、K児の顔を見て言った。

P児　　「いっしょにやりたいの？」（K児の顔をしっかり見て言った）
K児　　だまってうなずいた
P児　　「じゃあ作り直す？半分ずつね！」
K児　　「うん」

笑顔になって二人でボウルに土を入れ始めた。

＜かかわり＞



○社会的側面の学びの様相

直接体験	感じたこと	学んだこと
・先生が持ってきてくれたボウルをＰ児に先に使われた ・Ｐ児の様子を見つめた ・小さい声で先生に自分の気持ちを言った ・M児がなぐさめてくれた ・Ｑ児やＳ児が意見を言ってくれた ・Ｐ児が一緒にやるかきいてくれた ・Ｐ児と一緒に土を入れた	・私がやりたいのに ・Ｐ児ちゃんずっとやってるな ・ 先生に助けてもらいたいな ・私がやりたいのよ ・そうそう！みんなでしたらいいよ ・あれ、Ｐ児ちゃんが誘ってくれた ・一緒にやるのもいいかな	・その場を離れないでいると、友達が声をかけてくれること ・みんなで遊ぶ（所属する）嬉しさ

○一人一人の育ちについて

K児はこれまで、自分の思いが通じない時や困った時には泣いてしまって、却って何を言っているかわからないことがあった。しかし、この事例では、そうではなく、その場を離れなかった。一緒に遊びたい、自分もみんなのように型に土を入れて遊びたいという気持ちの方が強かったのではないだろうか。それでも、P児には、直接思いをぶつけていなかったようである。事例を起こしてみると改めてK児の言葉の少なさがわかる。

P児は、自分のやりたいことは通すところがある。ボウルはどういった経緯でP児が使ったかはわからなかったが、顔を上げずに話すところを見ると、K児からとったという気持ちもあったかもしれない。また、この時には、ままごとの中でのお菓子作りだったようで、P児からするとK児の役割は「つくる人」という認識でなかったとも考えられる。

M児はこれまでも、K児が困った立場になり、そこへ教師が来ると「K児に優しくしなくちゃ」という態度になっていた。それで、「～してあげようか」という言葉が出たと思う。しかし、K児はそれでは納得しなかった。それを聞いていたQ児とS児はこういう時どうしたらいいか、これまでの経験の中から語った。それでも実際は、Q児もS児もP児と向き合って「こうしたらいい」と言ったわけではなく、またK児に向かって「はっきりいいなよ」「一緒にしたいんでしょ」と言ったわけでもない。まだコミュニケーションが深くなっているとは言い難い。

○環境の構成について

本事例は、意図したものではなかったが、型の数に限りがあったことで困りごとは発生した。クラスから近いこの場所は、この幼児らにとって、しゃがんでじっくり遊ぶ空間であり、そのことが、K児がその場から泣いて離れなかった遠因になったかもしれない。

○教師のかかわりについて

これまでどちらかというと、K児が泣くのを見て、「助けてあげなくては」と養護教諭が捉えていたと思う。しかし、それでは「泣いたら先生が何とかしてくれる」「泣いたらみんなが私を優遇してくれる」という学びになっていたのではないかと考えた。この事例の場合は、K児は「私も使いたい」と思いながらも直接言えないことに困っていると思われたので、周囲の幼児も含め考える機会を持って欲しいと思った。そこで、なるべく言葉は発せず、視線を送ったり、うなずいたりするだけで幼児らの言葉を待った。そのことで、幼児らは言葉を少しずつ出したのではないかと思う。

○今後に向けて

K児はこの事例でも、あまり言葉を多く発していない。みんなに助けられて、自分の思いを叶えている。もっとK児が自信を持って自分の思いを表出できるような援助が必要だと思う。集団活動でも、あまり大きな声で話したり、歌ったりしていないので、声を出せる安心した場も重要だと思う。また、それぞれの幼児らが、相手を感じて感情をぶつけ合うことを保障したい。

事例３　「先生も一緒にやろう」（４歳児）　　12月１日（金）

遊びの時間にプレイルームに作ってあった巧技台の迷路で４歳児の数名が遊び始めた。橋を渡ったところでは、じゃんけんをする役の子がいて、じゃんけんに勝ったら、通れるというルールで遊ぶことが多かったが、この時には、じゃんけん役はいなかった。K児はこれまでに何度も迷路を経験していたが、じゃんけん役はやったことがなかった。養護教諭は声を出し合いたいと思い、じゃんけん役の場所に座ってみた。

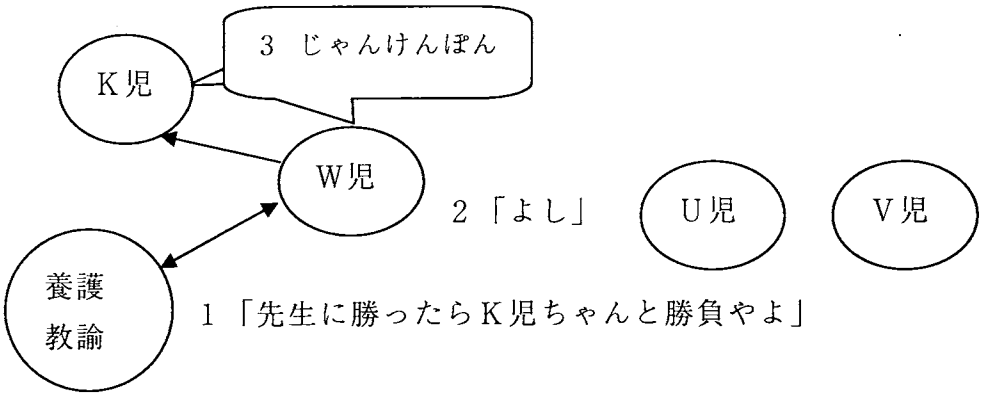
U児　「じゃんけんしよう。じゃんけんぽん！　負けた」
養護教諭「また来てね」
V児　「次、私。じゃんけんぽん！　勝った」
養護教諭「負けちゃった。どうぞ」
K児　「じゃんけんぽん」
養護教諭「負けたー。どうぞ」

しばらく続けたが、迷路の列が途切れた。
そこへK児がやってきて

K児　「私もじゃんけんする。先生も一緒にやろう」（養護教諭と同じ台の上に並んで座った）
養護教諭「いいよ。あ、W児君が来た。W児君、みんなでじゃんけんね」
W児　「え、いやや」
養護教諭「じゃあ、先生に勝ったらK児ちゃんと勝負やよ」
W児　「よし」
W児・K児・養護教諭「じゃんけんぽん！」
W児　「勝ったー」
K児・W児　（二人で顔を見合わせて）「じゃんけんぽん」
W児　「勝った！」（嬉しそうに迷路を先に進んでいった）
養護教諭「負けちゃったね」K児と目を合わせて笑った。

その後、K児は数人とじゃんけんをして楽しんだ。

＜かかわり＞



○社会的側面の学びの様相

直接体験	感じたこと	学んだこと
・迷路で遊んだ	・迷路はおもしろいな	
・先生とじゃんけんをした	・先生がじゃんけん役だ	
・先生の横に座って一緒にじゃんけん役になった	・私もじゃんけん役したいな	・先生と一緒の方が安心だ
・W児君が来て、じゃんけんをした	・先生と一緒ならできるぞ	・じゃんけん役になると、みんながじゃんけんをしに来てくれる
・W児くんとじゃんけんをして負けた ・みんながじゃんけんに来てくれた	・負けたけどおもしろいな ・じゃんけんができておもしろいな	・ルールのある安心感

○K児の育ちについて

この数日前に、K児の母から「最近、家でも参観日の様子を見ていても、あまり話をしない。友達に何か言われても、言い返すところまで行っていないようだ。周りの友達ほど話せないので、口数が減ったのではないかと思う。自分の気持ちをもっと出すのが、これからの本人の課題だと思う」という話を聞いた。K児は確かに以前より口数が減っているように感じる。それは周囲の友達との関係を感じたり、どう表現したらよいか迷ったりしているためとも思われる。この事例では、迷路遊びの中に教師の姿を見つけ、一緒にいたらじゃんけん役もできるし、おもしろそうだなと感じたのではないか。教師には安心して自分の思いを出せるようになっている。

○環境の構成について

プレイルームの迷路は、数日前から作られており、4．5歳児のお店屋さんとして存在していた。K児はそこでお客さんとして経験をしていた。この日、その場には5歳児はおらず、4歳児だけが自由に使えるようにしてあった。また、広い空間であり仲良しの友達以外も自由に出入りし、接する場になっていたため、いつもは一緒に遊ぶ仲間でないW児とじゃんけんをする機会となった。

また、「じゃんけん」は友達とリズムや声を合わせるもので、声を出して遊ぶルールの基本であり、K児にとってよい機会だったと思う。

○教師や友達のかかわりについて

K児に大きな声を出させたり、友達に思いを伝えたりする機会をつくりたいと思いながらも、なかなかできなかった。この日は、もちつき大会の後の自由な遊びの時間で教師もゆったりとかかわれた。これまで、K児に話しかけたり、一緒に弁当を食べたりして、かかわりをもっていたので、「先生も一緒にやろう」とK児から声をかけてきたと思う。台の上に並んで座ることで、K児は安心感が持てたと思う。

W児とK児にはあまり接点はない。この時にもW児が3人でじゃんけんをするのは嫌と言った時、K児がショックを受けるのではないかと一瞬思ったが、K児を最後のじゃんけん相手として位置づけることで、W児も乗ってきた。ちょうど、W児が教師に勝ったため、K児とW児のじゃんけんが実現した。負けてもみんなで声を合わせてじゃんけんをしたのは、おもしろい経験になったと思われる。

○今後に向けて

ごっこ遊びなどの場面でも、K児が自分の思いを友達に表出したり、相手の思いを受け止めたりしながら楽しめるよう、援助のあり方を考えていきたい。初めは教師が介入しても徐々にK児が自立していけるようにしたい。

事例４－１　「早く寝ないと！」（４歳児）　12月13日（水）

年長組の数名が、サンタクロースに扮した幼児をそりに乗せて曳きながら、プレゼントを配る、サンタクロースごっこをしていた。そりは年中組の保育室前廊下を行ったり来たりしていた。幼児らの間では、寝ている子はプレゼントがもらえるということになっていた。

K児　　「寝ているともらえるのよ」
養護教諭　「そうなの。サンタさんいつ来るかな」

しばらく、さくら組の中でK児と話をしていた。

K児　　「あ、サンタさんが来た」廊下を通り過ぎていくそりを見つけて言った
養護教諭　「ほんとうだ」

K児は床に寝ころんで、目をつむった。
養護教諭もすぐ側に寝ころんだ。

10秒ほどそのまま待ってもサンタのそりが来ないので、起き上がった。
すると、またそりが廊下を通り過ぎて行った。

K児　　「きゃあ、早く寝ないと！」すばやく寝ころんで、目を閉じた

養護教諭も一緒に寝ころんだ。
K児は楽しそうに素早い動きをしていた。
しかし、またサンタとはすれ違ってしまった。そんなことが３回あった。

K児　　「来ないね」
養護教諭　「プレゼントを入れてもらう靴下を作らない？」
K児　　「うん」

M児もやってきて、３人で靴下を作った。でも、サンタはやってこない。

養護教諭　「そうだ。サンタさん、ほし組さんにいるのかな。行ってみる？」
K児　　「行く！」
M児　　「私も行く」

靴下を持ってほし組へ行くと、サンタ達はおらず、他の数名が製作などをしていた。年長組のY児と話をしていると、サンタごっこのメンバーがやってきた。

K児とM児はその場で寝ころんで、プレゼントをもらっていた。

養護教諭は、その様子を少し離れて見ながら、年長児とともに、プレゼント用のキャンディーを作っていた。

K児　「それなあに」サンタにもらったプレゼントを手に近づいてきた。

養護教諭「キャンディーだよ。プレゼントにしようかと思って」

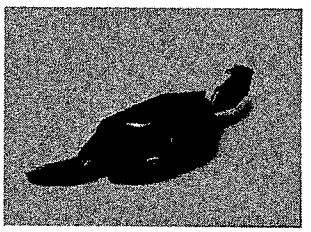
K児はそれをじっと見ていた。

事例4－2　「おうちで作ってきたの」　12月14日（木）

サンタクロースにプレゼントをもらった翌朝、K児が登園してきた

養護教諭「おはようございます。K児ちゃん、昨日楽しかったね」

K児　「うん。　あのね…」K児はポケットから何かを大事そうに取り出した。



養護教諭「なあに？」

K児　「おうちで作ってきたの」

養護教諭「あ、キャンディーだ」

K児　「うん、（先生に）あげる」

養護教諭「え、いいの？」

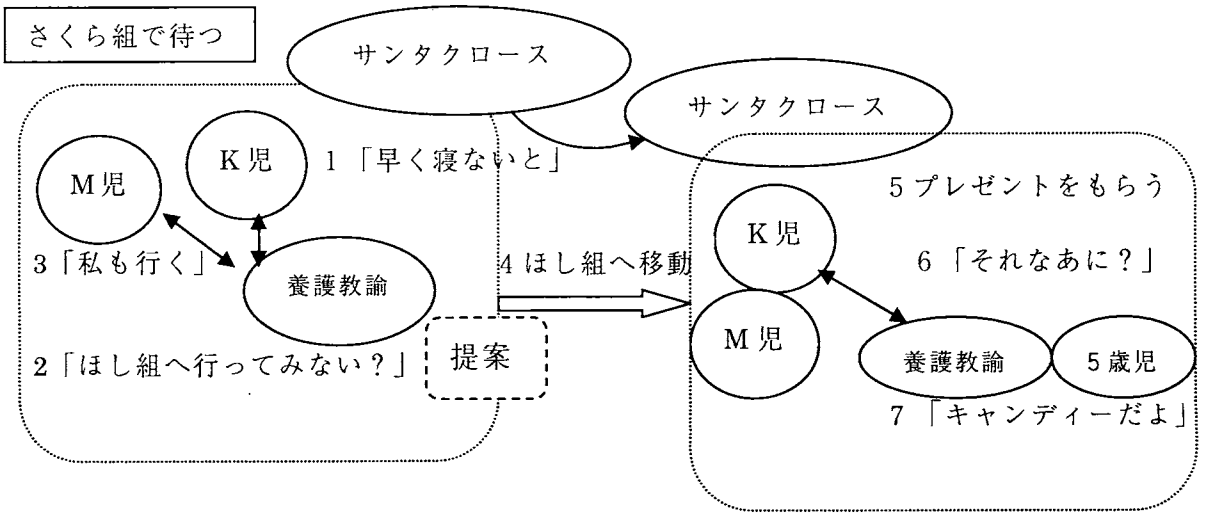
K児　「うん、いいよ。これねえ、こうやって中に丸めたのを入れて、赤いので包んで、こうして…・」

留めてあったテープをはずして、中の新聞紙を取り出して、説明をした。

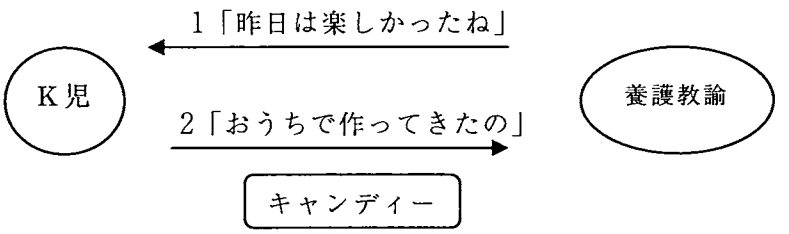
養護教諭「うわあ、嬉しいなあ。おいしそう」

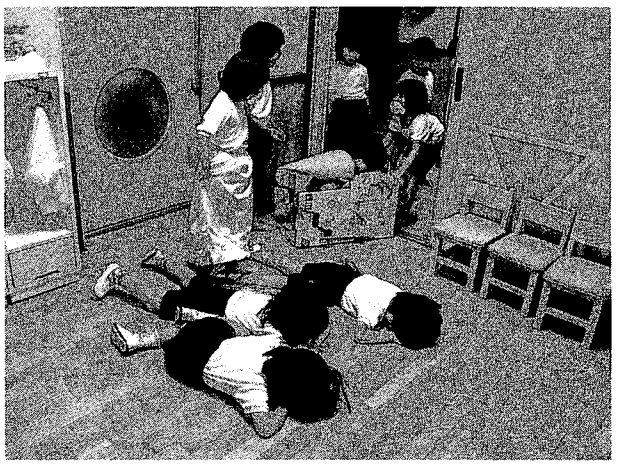
K児は嬉しそうに微笑んだ。

＜かかわり４－１＞

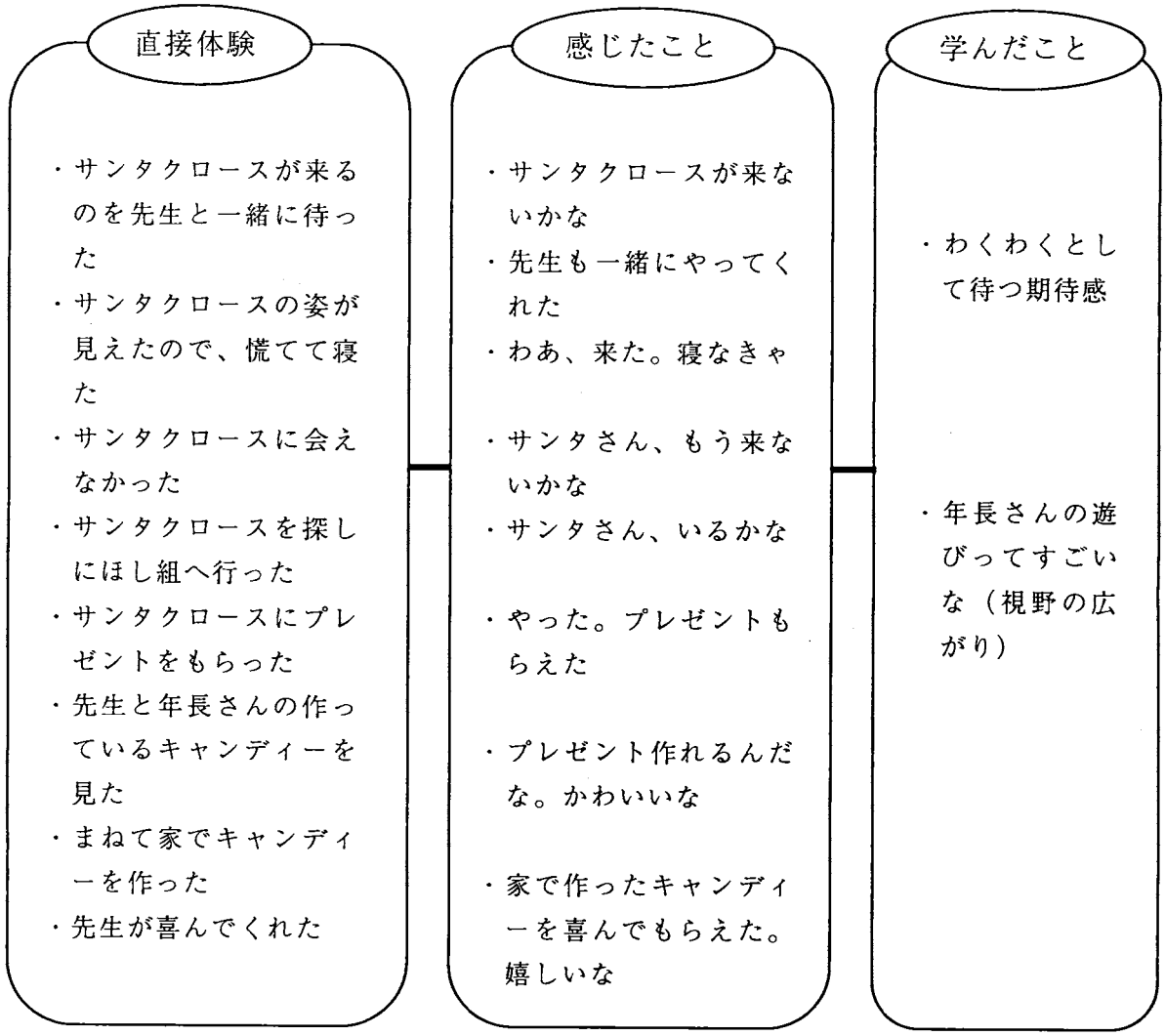


＜かかわり４－２＞





○社会的側面の学びの様相



○K児の育ちについて

11 月の楽しいランド（お店屋さんごっこ）の経験から、年長組への興味は高かったと思う。ほし組へ行くことにも躊躇しなかった。サンタクロースにプレゼントをもらうという遊びのイメージを感じて、楽しく参加することができた。サンタクロースを待つ、わくわくした感じをからだで表したり、「きゃあ」と歓声をあげたり、素直に表現していた。

○環境の構成について

保育室の中にはクリスマスの掲示がされており、サンタクロースごっこを目にしたり、クリスマスのつどいが近づいてきたりといった、わくわくとした期待感を演出する環境

であった。行事とともに遊びの楽しさを教師みんなで支えた。

サンタクロースにプレゼントをもらうために慌てて寝るという遊びは、「いないいないばあ」や「かくれんぼ」や「だるまさんが転んだ」などの遊びに通じており、相手がどう出るかを期待するおもしろさがあった。

楽しいランドで年長組へ入った経験の後であり、しかもほし組の中には数名の幼児しかおらず、K児やM児が入っていきやすい状況であった。

○教師や年長児のかかわりについて

この日は、サンタクロースに会いたいというK児の気持ちがわかったので、一緒に床に寝転んで、サンタクロースを待つことにした。ほし組まで行ってみることにしたのは、このまま終わらせたくないと思ったためで、教師と一緒なら行けると考えた。年長児らは、とても親切にプレゼントをくれて、K児の願いを叶えてくれた。その満足感があったからこそ、プレゼントづくりという次の関心が湧いたのだと思う。

○今後に向けて

担任や家庭との連携を活かし、自分でやってみようとする気持ちを支えたい。K児が遊びの中でからだを動かしたり、声をあげたりしながら、友達とのかかわりを増やし、遊びをつくっていけるような教師のかかわりを考えたい。

事例５　「ねえー」　（４歳児）　２月23日（金）

Ｋ児、Ｍ児、Ｚ児の３人が、保健室前の廊下を楽しそうに行き来していた

養護教諭　「あなたはだあれ？」
Ｋ児　　「私は山犬よ」犬のまねをして、廊下を跳ねながら行ったり来たりしている
Ｍ児　　「私は猫女よ」猫の手つきをしている。
Ｋ児・Ｍ児「ねえー」二人で声を合わせて言った。

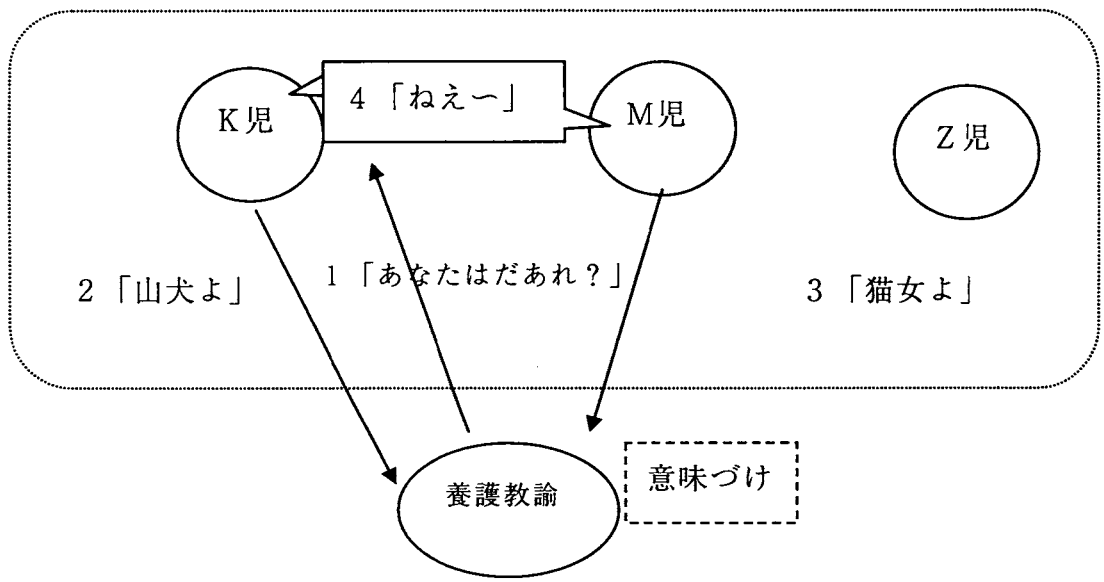
Ｚ児も跳ねながら楽しそうに保育室に入っていった。

しばらく後になってＫ児が保健室にやってきたので、訊いてみた。

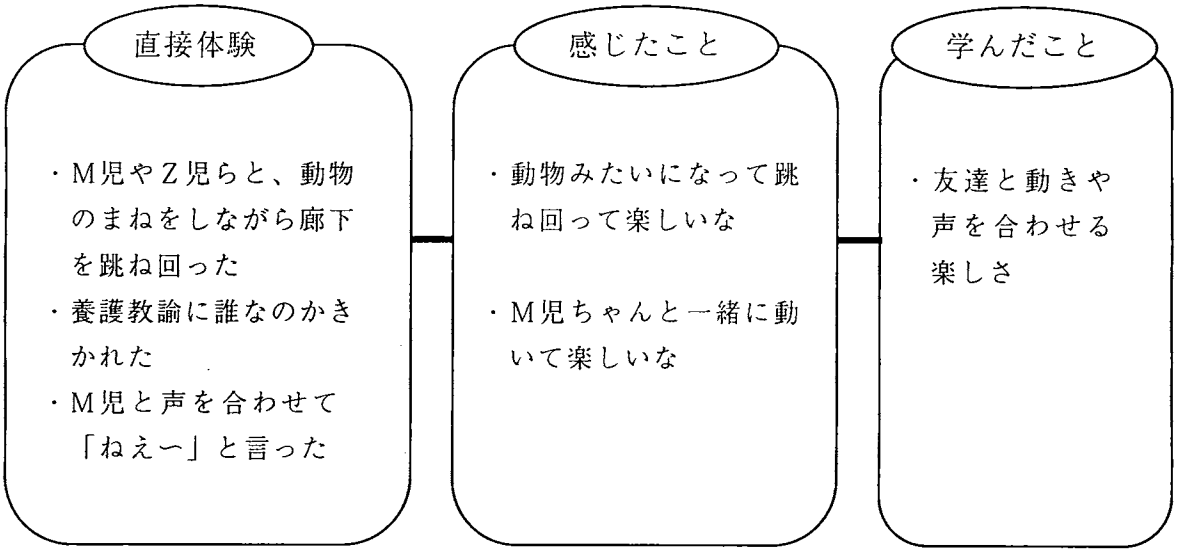
養護教諭　「ねえ、Ｋ児ちゃん、さっきの山犬って何？」
Ｋ児　　「もののけ姫に出てくるよ」
養護教諭　「そうなの。猫女は？」
Ｋ児　　「うん？」

Ｋ児とＭ児は、関連のないキャラクターをイメージしていたようだった。しかし、跳ねながら廊下を行き来して同じリズムで動いているのが楽しいといった雰囲気だった。

＜かかわり＞



○社会的側面の学びの様相



○K児の育ちについて

K児は、3学期の遊びや表現会を通して、友達と動きや息を合わせることを学んできたと思う。まだまだ発音は不明瞭なことがあるが、友達の様子を見たり、合わせようとしたりしている。特別なものや環境がなくても、友達とからだだけの遊びができた。表現会の劇の経験で、役になりきる楽しさを知り、これまで映像として見ていた世界を自分で演じることで表現できるようになったのではないだろうか。

K児とM児は同じ物語のイメージではないようだったが、それでもからだで表現して楽しめるようになっていた。

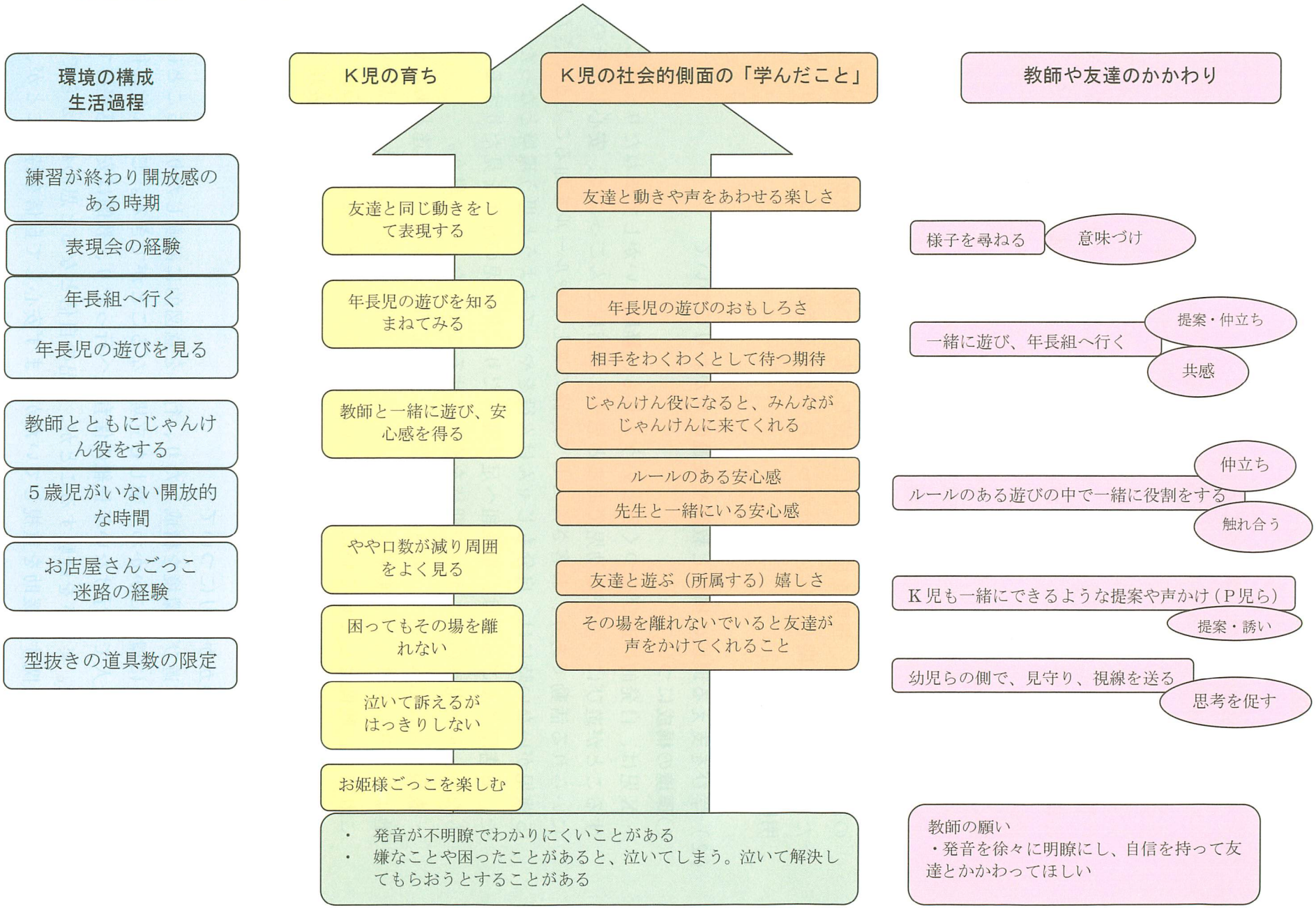
○環境の構成について

この頃は、表現会が終わり、修了式の練習が始まる前の開放感のある時期であった。自由にからだを動かすことができる場があった。

○教師や友達のかかわりについて

教師が「あなたはだあれ」と尋ねたことで、K児とM児はそれぞれのイメージを伝えた。そして私達は一緒に遊んでいるんだよ、という雰囲気になったと思う。からだを動かし何となく遊んでいたのが、教師の視線や言葉が共鳴板になって、意味づけができたと思う。

１年を振り返って　～K児の姿から～



＜一年を振り返って＞

（1） K児の社会的側面の「学んだこと」について

・K児は、2年保育で入園直後の1学期、お姫様ごっこをよくしていた。その時には、言葉を交わしてかかわり合うというよりも、場を共有して楽しんでいたようだった。2学期になり、徐々に友達との関係や自分の思い通りにならない場面に気づき始め、口数が少なくなった時期もあった。園でのさまざまな経験を通して、泣かないで**「その場を離れないでいると、みんなが声をかけてくれる」「所属する嬉しさ」**を学んだ。教師や遊びの場とかかわっていき、K児は**「教師と一緒にいる安心感」「ルールのある安心感」「じゃんけん役になると、みんながじゃんけんに来てくれること」**を学んだ。

・K児はよく周囲を見ており、年長児の遊びにも興味を持った。**「相手をわくわくとして待つ期待感」「年長児の遊びのおもしろさ」**に気づき、視野を広げていった。

・表現会の経験を通して、**「友達と動きや声をあわせる楽しさ」**を学んでいった。園での経験を積み重ね、視野を広げ、自信を持ち、友達や教師とのかかわりを広げていったと思う。発音に関しては、自分から言おうとする姿が見られるようになり、徐々に明瞭になってきた。

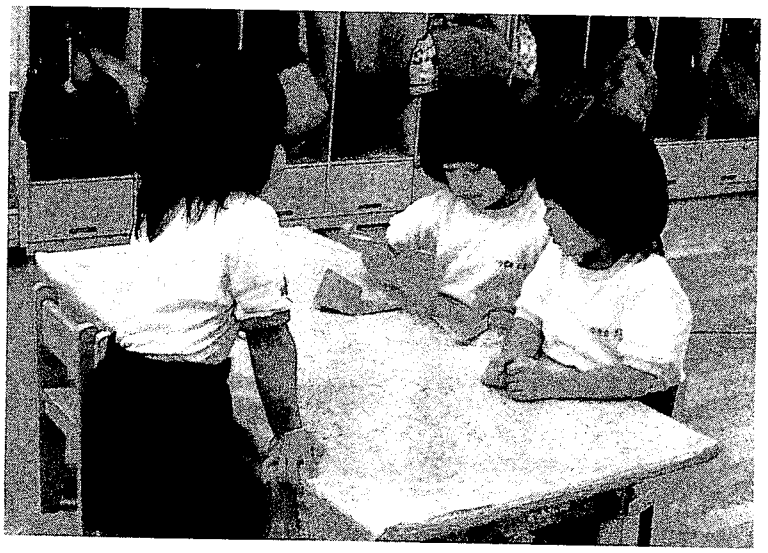
（2） 学びを支える環境の構成と教師や友達のかかわりについて

○環境の構成について

・K児は、自発的に遊びをつくるというよりも、**経験**をいかしてまねたり、演じたりすることが遊びにつながる幼児であると思う。お店屋さんごっこは、**安心**してその場にいられる活動であり、お客さんとして迷路の楽しさやルールを知ることができた。5歳児がいない時には、自分もじゃんけん役をやってみようと思う環境となった。また、**お店屋さんごっこ**は、年長組へ足を運んだり、年長児の様子を見たりする機会にもなり、年長児へのあこがれや期待を感じさせることになったと思う。

・**表現会**もK児にとって、大きな経験だった。役を演じる楽しさや友達とあわせる心地よさを知ったことで、動物になりきってからだを動かす遊びができたと思われる。これまで、映像として見ていた「もののけ姫」のキャラクターを自分がからだで表現するようになった。自由にからだを動かせる環境も、K児らがのびのびと表現できる**空間**となっていた。

○教師や友達のかかわりについて

・養護教諭は、遊びの環境を構成したり、行事を意図的に計画したりすることはないが、幼児とともに環境にかかわり楽しむ立場になることができる。じゃんけん役を一緒にしたり、一人では行けない年長組の保育室へ行ったり、教師は安心感が持てるようにかかわった。楽しさを経験することが、K児の自信となると思われたからである。当初は、発音に関する援助を重視していたが、まず安心して自信を持つことが、大き

な声を出したり、表現したりする姿につながると思われる。
・K児が泣いているだけの事例1のような場面では、友達からかわいそうだな、と受け止められやすい。泣かずに気持ちを伝えるためには、安心できる相手があることが、大切であると思う。